

立山町称名滝周辺における場所のあり様と特質の探求

日大生産工（学部）○山崎 海

日大生産工 篠崎健一

1. はじめに

本稿は、筆者が生まれ育ち、愛着を持ち、何度も訪れたことのある場所を、改めて体験し、深く見つめなおすことによって、なにか新たな、建築をつくりだすための拠りどころを得ようとする試みの報告である。

2. 対象とした場所

称名滝（しょうみょうだき）は、富山県中新川郡（なかにいかわぐん）立山町の南東部、北アルプス立山連峰の山腹に位置する、わが国最大の瀑布である。その周辺には荒々しく鋭い地形をはじめ、人類の手が加わっていない豊かな自然が存在する。



Fig. 1 称名滝周辺の風景

3. 方針

野外科学^{*1}を基盤として、一人称視点と超瞰（ちょうかん）的視点を合わせ持ち、探求を深めることで、本探求全体の質を高めようとした。

3.1 野外科学

何よりも現地を歩きまわること重点を置いた。リアルなフィールドに身体を投入することでしか感じとれない光、色、音、におい、温度、湿気、空気を大事に扱おうと意識した。これは野外科学的な探求の姿勢である。

3.2 一人称視点^{*2}

この場所に対する他の誰かの感覚、または社会で流通する一般的なイメージでない、自らの感覚や情緒と、それによって促される思考や記憶を頼りに探求を進め

た。客観的な調査では捨象されてしまう、各個人が持つ独自の思考にこそ、ものごとの本質が潜んでいると考えている。

3.3 超瞰的視点

先入観や、自らの中に蓄積された知識を排除して、ものごとを捉えようとした。この視点は筆者が「鳥瞰的」という言葉を拡大解釈することで、ひねり出した。

「鳥瞰的」には、「鳥が上空から見おろすように全体を広く見渡すさま」という意味がある。しかし、この「鳥」という語があらわしているのは単に、三次元的な飛行高度（高さ）だけでないと考えた。人間が（筆者が）ものごとを認識するとき、その形状や色、手触り、におい、音、味、を感じると同時に、それらが発する、あるいはそれらに付随する情報（過去の経験から筆者の中に蓄積された知識や知恵）を認識している。例えば、ガラス製のコップに対して、透明であるという色と、つるつるしているという手触りからガラスと捉え、さらに、中心がくぼんでいるという形状から、意識せずにコップであると判断する。この思考回路は経験を重ねるごとに洗練される知的な能力ではあるが、動物や幼児や原始人が持っている（持っていた）であろう、純粹なものの捉えかたとは異なる。

筆者は、ものごとに付随する情報をできるだけ排除して本質を捉えようとする視点を、超瞰的視点と呼び、本探求全体で常にその視点を携えることによって、根源的で、創造的な思考が喚起することを期待した。

4. 方法

以下の4つを探求の具体的な方法とした。〔2〕、〔3〕の方法は、再び現地を体験することにより、繰り返される。それによって新たな気づきが生まれた。曖昧だった思考が明確になるという効果があった。

- 〔1〕体験する
- 〔2〕注目する要素を挙げる
- 〔3〕記述する
- 〔4〕まとめ（未着手）

〔1〕探求を開始した2016年6月以来、6度現地を訪れた。複数の交通手段（電車、バス、自家用車、同じ車でも

Exploring the characteristics of place where around Shomyo Falls in Tateyama

Kai YAMAZAKI, Kenichi SHINOZAKI

毎回違う席に座った)で現地へ向かった。現地で気づいたことはメモした。よいと思った風景、気になった箇所は写真に収めた。

[2]場所を構成する要素として、位置、地質、地形、気候、日照、植生、歴史の七つに注目した。挙げられた項目は、現場で記録したメモと写真を整理する役割と、筆者の中に存するが、いまだ表現できていない思考を表出させる糸口としての役割を担っている。超絶的なワード挙げることに留意した。具体的には、人類がいなくても起こり得たであろうものごとのアウトラインを項目とした。手付かずの自然が多く残っている場所を探求する上ではそれが相応しく、またそれによって根源的な思考が喚起されると考えたからである。

[3]その場所で経験したことを記述^{*3}した。記述は、事実記述(その場所にある誰もが同様に確認できるものごと)、経験記述(その場所で自分が考えたものごと、経験したものごと、場所から受けた作用)の二つの文章からなる。この際に事実記述は文献を用いて補った。文献で補うことによって事実の説得性が増し、さらに筆者の思考を膨らませた。

Fig.2に項目「地質」における記述の例を示す。この記述の表現方法については、現在検討中である。

[4](未着手)各項における記述を基に、まとめを記述する。その場所にあった事象や受けた感覚は違っても、同じような思考に至っている。といったように各項の記述間の関係に注目し、ボトムアップした文章を記述^{*4}する。それは、本質的、深層的なその場所のあり様や特質に値するはずである。

5. 展望

本探求は手探りのまま進行中である。参考にしたKJ法(川喜田,1967),写真日記(諏訪ら,2015)と自分が行っている方法の差異や、互いの利点を発見したい。

脚注

*1 単に野外で活動するだけではなく、まだ知らない何かを発見しようとする姿勢、方法を指す。¹⁾

*2 その人の人生背景、性格、ものの考え方という個別具体性を捨て置かず、ものを捉えようとする視点。²⁾

*3 この方法は写真日記³⁾を参考にした。

*4 この方法はKJ法¹⁾における構造化を参考にした。

参考文献

1)川喜田二郎,発想法,中公新書,(1967)

2)諏訪正樹,堀浩一,一人称研究のすすめ,(2015)

3)諏訪正樹,藤井晴行,知のデザイン,(2015),p.142~150

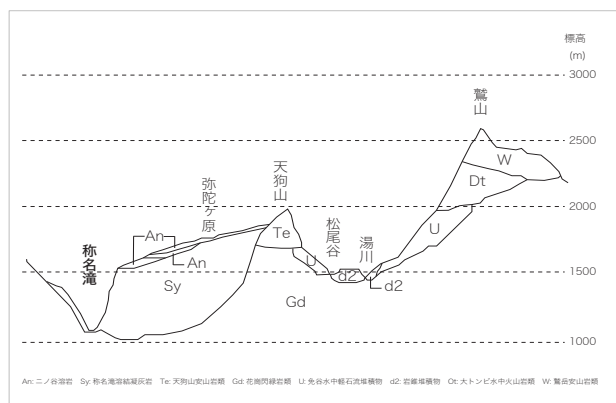
地質

[事実記述]

- ・ 土砂崩れ、地崩れが頻繁に起きる。
- ・ 称名滝一帯の地質は溶結凝灰岩である。
- ・ もろく、水を含むと侵食しやすい。
- ・ 約 10 万年前に室堂付近から噴出した溶岩で形成された弥陀ヶ原台地を称名川が徐々に侵食した。
- ・ 長い歳月をかけて現在の滝つぼまで約 12km 後退した。
- ・ 滝から見て左側の崖の途中には高さ 500m、幅 2km の悪城の壁を残した。
- ・ 積雪の多い冬季(標高 1000m 地点で例年約 3m の降雪量)、また連続雨量 70mm 以上、時間雨量 30mm 以上を観測した日は立ち入りが禁止される。

[経験記述]

人が住まないこの場所に漂う畏怖、または、少しでも奥まで進みたいという好奇心を、悪城の壁(とても恐ろしく人間をよせつけないことからそう名付けられた)の凹凸や流れ落ちる滝の轟音が助長する。靱性の無い地盤としてのもろさは、地崩れや土砂崩れという現象を生み、人間の生命や財産を脅かす。しかし、必ずしもそうでない。流れた土砂が固まり、扇状の地形をつくり、その上に人間が暮らしている。川沿いに生えるブナの葉が落ちて土壌となること、雪が溶け海へ流れることと同じように、しかしより大きなスパンを持った自然のサイクルの一部である。また、雨量規制による閉鎖という不完全さは儚さにつながる。弱さ、もろさ、壊れやすさ、不完全さとは、頑丈さや安全さの欠如ではなく、それ自体が優れた特徴である。



立山地域の地質断面図 富山大学 小林武彦「立山火山の地質学的研究報告書(1997)」引用、筆者加工

Fig. 2 記述の例